

冬の朝日

尾上八郎

竹藪に冬の朝日のたゞさせば驚ぞなきつるその梢しんごとに。

(以下五首旅を思ひて)

樺色にはてなく枯れし草山に黒くかげしてゆきし雲。  
瘦せし山にはかに迫り冬のかげくらざとこゝろに湯ぞおちにける。  
日にぬれて竹のさ枝は皆伏しつ霜のあとなる冬の裏山。  
くらき山胡粉こぼし、如くにも曉の雲みだれたりけり。  
午後となれば日かげやうく黄ばみゆく冬はこれこそ悲しかりけれ。  
夜の氣の珠とこりてはすがりつく玻璃戸のうちにとれる燈火。  
水のごと月てりくれば大海の底のこゝちし出で遊ぶかな。  
しみくくと冬の寒さの身に入れば心深みを覚え來にけり。  
や、深く人の上をも考ふる餘裕をば得つ年たけにけり。

葛飾の歌

一、四 安。永 み ち

日ねもすに雨は止まざりさびしさがかすかに聲となる心地して。  
葛飾の村人達は今日も來てありのみ召せといひてゆきけり。  
遙かなる都の空のうす明りみつつ今宵も門をさすなり。  
血の如く鳳仙花こそ散りゐたれあした悲しく見やる庭のべ。  
この虫もひとりなればか庭の木のきらめく白日ひるも啼き止まずけり。  
秋の日の河面すこし見ゆる窓わがものにして今日もきぬぬふ。  
打ちもだしけふもくれけり窓ぎはのあんずは白くかへりさきけり。  
一筋の我がおち髪が花さしの秋草の上にかゝりてゐたり。  
下總の小さき町に移りきて提灯のひをなつかしみけり。